



蕉心  
紙譜  
録

下





蕉門詠諧源下

附句乃事

蕉門詠諧源下  
三愛有り昔と身如と昔と中法を如しと  
古今と今と昔と今と昔と今と昔と  
附句乃事本倒と今と昔と今と昔と  
西風と今と昔と今と昔と今と昔と

早稲田大学  
文学部図書

個人研究  
雲英末雄  
54-09194



いかにいかに泳ぎの服とせよ  
おそろいならせよと白

る東の申にせよのう将

とらふ白とせよお世のなまよとく  
くら小後義の弁化しおそろいならせよと  
白

しらせしむるならせよ小町あま

と云義の白とせよいけらせよいやく  
ていしお世のうかす時のうらけり

義の衰痛しきねー境東ふうあふ  
とらふ将くしころとらふ血動し  
しらしむるならせよいけらせよいやく  
利体の葉の湯おあひく本とぬ  
とらふとらふとらふとらふとらふ  
利体とせよ不興とせよ新古れ  
とらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふ  
とらふとらふとらふとらふとらふ

しつゝ白き道具たりて其の商人の滞遊をて其の  
是らるる席にありてしつゝ是らるる是は九折をたて  
張りたる月利をてしつゝ其の商人の滞遊をて其の  
紙のしつゝは其の席のきりてしつゝ其の商人の滞遊  
しつゝは其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて

尚書曰所自其變化とて其の料理のしつゝは其の  
しつゝは其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて  
時しつゝは其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて  
連中其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の  
の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の  
其の商人の滞遊をて其の商人の滞遊をて其の商人の

業の信を頼りて... 附向... 白...

附向... 附向... 附向... 附向... 附向...

白...

先原の... 附向... 附向... 附向... 附向... 附向... 附向... 附向... 附向... 附向...



あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~

あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~

あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~

あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~

あ~~~~~  
あ~~~~~  
あ~~~~~





川ゆやえのわさき草の花

亀草

是の水きりし草をたむらむとていふ優ありとて葉句  
しゆせしとて草同しとていふとて丹草とて落  
よとて草獨りしとていふ

古き方回葉とていふは公の葉といふこと

しゆせしとて草同しとていふとて丹草とて落

とて類ありしとていふは葉とていふこと  
葉とていふは公の葉といふこと  
葉とていふは公の葉といふこと  
葉とていふは公の葉といふこと

洋の田畑をのまて葉の花とていふとていふこと

しゆせしとて草同しとていふとて丹草とて落

葉とていふは公の葉といふこと

葉とていふは公の葉といふこと

葉とていふは公の葉といふこと

葉とていふは公の葉といふこと

葉とていふは公の葉といふこと





何と~~~~~狂つてたがり

らとえおれ人小まゝる事一ぢと~~~~一人二人小うらあ  
狂事~~~~人のいふよる~~~~狂~~~~いさ~~~~  
~~~~

其角回をら~~~~狂のいさ~~~~~~~~  
うれ西は~~~~人の骨あ~~~~人ぞ作~~~~て~~~~幾平~~~~と~~~~狂~~~~るぢ  
と~~~~~~~~い~~~~る~~~~狂~~~~ら~~~~~~~~~~~~  
又の幾平のわ~~~~と~~~~~~~~狂の法れ~~~~狂~~~~狂~~~~  
~~~~の~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

~~~~おぬ~~~~~~~~~~~~  
~~~~我~~~~狂~~~~狂~~~~  
~~~~小~~~~善~~~~と~~~~者~~~~を~~~~と~~~~  
~~~~忽~~~~断~~~~腸~~~~乃~~~~つ~~~~ひ~~~~と~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

名をたしむるは... 有祥あらむ... 兼て...  
あさひ... 七十一 任口

舟丹の果... 舟丹の果... 舟丹の果...  
舟丹の果... 舟丹の果... 舟丹の果...

舟丹の果... 舟丹の果... 舟丹の果...  
舟丹の果... 舟丹の果... 舟丹の果...  
舟丹の果... 舟丹の果... 舟丹の果...





まゝに〜〜と書きながら読もうにはと我〜とある  
 ーいぢー  
 去来白元 難得と聞く〜とあるから〜とある〜とある  
 今も拙さるる書と書くと〜とある〜とある〜とある  
 考るると〜とある〜とある〜とある〜とある  
 実体たがぬ〜とある〜とある〜とある〜とある  
 なるなる〜とある〜とある〜とある〜とある  
 一〜とある〜とある〜とある〜とある  
 一〜とある〜とある〜とある〜とある

まゝに〜と書きながら読もうにはと我〜とある  
 ーいぢー  
 去来白元 難得と聞く〜とあるから〜とある〜とある  
 今も拙さるる書と書くと〜とある〜とある〜とある  
 考るると〜とある〜とある〜とある〜とある  
 実体たがぬ〜とある〜とある〜とある〜とある  
 なるなる〜とある〜とある〜とある〜とある  
 一〜とある〜とある〜とある〜とある  
 一〜とある〜とある〜とある〜とある





此のいふことゝも、  
 憐れむと云ふことゝも、  
 肉一握と云ふことゝも、  
 おくことゝも、  
 色ふことゝも、  
 同業と云ふことゝも、  
 の向一西院と云ふことゝも、  
 よと云ふことゝも、  
 と云ふことゝも、

白れと云ふことゝも、  
 と云ふことゝも、  
 うと云ふことゝも、  
 然ると云ふことゝも、  
 先師の心と云ふことゝも、  
 白れと云ふことゝも、  
 めと云ふことゝも、  
 路通

先師の云はれを聞くなり

十國子も小粒もさうね秋の風 汗六

先師曰く白と黒のちりちり

はれ位とさ

卯の花れをさくるまゝの門 去来

先師曰く白の位争ふ事あるはと云ふ事曰くはれ白位と

争ふ事あるはと云ふ事曰くはれ白位と争ふ事あるはと云ふ事

はれと換の事あるはと云ふ事曰くはれ白位と争ふ事あるはと云ふ事

あゝ〜〜〜或はさう〜〜〜あゝ〜〜〜或はさう〜〜〜あゝ〜〜〜

位下はるん

白より飛とつゝあありは穢清りよ物終或と淫平

張きとのく〜〜〜飛つらり〜〜〜池階のらふ飽階のらあ

か〜ハ瀬階のらふあ〜〜〜白の位門の位位法平法

と云ふ事と〜〜〜白位と〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜

あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜

あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜

あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜

あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜あゝ〜〜〜

信の先師のあゝあゝと云ふ事、  
又は彼の事、いふ事、いふ事、  
いふ事、いふ事、いふ事、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、

信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、  
信考、信考、信考、

先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、

先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、  
先師、先師、先師、

唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、  
唐那、唐那、唐那、









ふくようくらのくひあるや自由地句の事  
とてかぬ流の氷希とけら少技うらよ物と地と  
お笑のなるこれ白くそ少技う事とさしやうさ  
ひらまう又自らとよくさかた料うま店とつみ  
らうやあきぢらう

所地口をよむわーとらと事と合をらち瀬流乃  
ちうしれるさし又さひーれぬー同ーか事とと  
合を流るさうの瀬流のさうさうさうさうさうさ  
やうさう自由地うーをらぢらうさう

と柳乃流ーさう瀬干ーうか

是きき事節相節の場さう流ーさうさうさ  
わさか故瀬干の流さうさうさうさ

新事や井の子時の件うさ

さうさう瀬流ー使あうらさうさうさうさうさ  
いさうこれ流入さうさうさうさうさうさ  
流さうさうさう流る新事や井のさうさうさ  
さうさうさう草の庵さうさうさうさうさ  
流流の水汲さうさうさ



これ清くふれ水と米と水とくをさと喰ら  
すとは米ありあきと法徳の水をこそ一食とら  
海へその水といくをさすはくく是く作れ  
場こそふい米乃りたるなりまら法徳ふやくま  
常々米乃をさす

又庫うく作本の者ありひか

掘子

一寸れ紋乃芥りくく

其角

け白ゆきの事あるく一物とらくくおうく  
作ら變るく一米のやういふこととくく

米とゆつとさるら作変るりやとく一これら似と  
とく人後よるく芋歌く中函とく一或ハ水産  
くくさるる米飯食やくの事とく一と先師と  
いすくめやとく

支考四巻の水く一落るるさくくさく作ハ音和さ  
風情けとちよくひく種むくむ水の音とくくか  
七又く作落くく書子の傍くくく山吹とくく交まど  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
すのぬきと落とくくくくくくくくくくくくくくく

とるやう好ましくおぼへてくまをきこひしひるを  
かゝりてあらたまへる事道もわらわへてゆく  
の二つとておぼへてゆく  
くまをきこひてゆく  
る——何となくおぼへてゆく  
——いふことおぼへてゆく  
何となくおぼへてゆく  
くまをきこひてゆく  
はくとくくハ合教養事自とらるるおぼへてゆく

これは一殺の女おぼへてゆく  
いふはとらるるおぼへてゆく  
世の御遊のまてらるるおぼへてゆく  
いふはとらるるおぼへてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく  
くまをきこひてゆく

月夜のふしは秋のきよき月夜に  
ユキのふしは秋のきよき月夜に  
ユキのふしは秋のきよき月夜に

に昔の歌の跡を  
とくちの昔の歌の跡を  
一決ならん

湖海の風流風情と申すは  
とくちの昔の歌の跡を  
とくちの昔の歌の跡を

風流と申すは秋のきよき月夜に  
風流と申すは秋のきよき月夜に  
風流と申すは秋のきよき月夜に



池橋の名太つこの名無し〜つとむく文利の橋と  
なるよや長橋のつとふ〜つとむく池田の〜つとむく  
つとむく〜つとむく〜つとむく〜つとむく〜つとむく  
去すあり

池の水まゝらとせらる〜 あり〜あり

とらるまゝらとふ池鏡一面〜曇りて水接天と  
みくぬハ草とさき〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ〜れ  
時〜時〜時〜時〜時〜時〜時〜時〜時〜時〜時〜時  
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

とらる替者の〜とらる〜とらる〜

去す四賢人義士乃類の澄乃〜とらる〜とらる〜とらる  
とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる

とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる

けらと高むら孫〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる  
とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる  
とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる  
とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる  
とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる〜とらる

ふふのよと口を一言なり傲とけやうとては小長  
流りいりうこれ感やうとては流るる強波り  
まゝとてふらうとけは感やうとては風是の人と感動  
とては流るる中流るる流るとしては所由海と風流り  
海をきく有るなりとては文なりとては流るるか

等類乃事

流るる流るる流るる流るる

流るる流るる流るる流るる

これらふれらるるこれ頃固如く流るる

——業の目よきくくくく

や他とては流るる流るる流るる流るる

流るる流るる流るる流るる

去来白の流るる流るる流るる流るる

とては流るる流るる流るる流るる

流るる流るる流るる流るる

後義撰の時

而揖よめ石のやまなり

卯水

日向の所乃中を横より奉向す日一先師曰也  
水うらむ名乃部云と吟も数語あり一善曰名  
の子歎くさつ多そと和弁は海より飛くむ  
一らさ馬と中とわさう信りれは是と御遊しに  
くら場を御揮しと乞ふ中れ剛と有是す  
師乃奉向すら一腕おされらとされも御分  
一先師曰られらと義は強くと一歩と  
うと名とれ物一して入る人撰志乃さる所  
あつ一とより終は降す侍家

同一時 月おや洋鼓存ら甚く悪 誠人  
は比伊丹のうら

此書は...とありてあり終や洋抑

とらあり然人ら入集い信らん先師曰身若  
とらありとら御義とら一と一と一と一と  
しねくありわやと云下せらとら控別ありと終と  
洋鼓の信種と云く信名と信くらとら信れら  
と云く一

相のあ乃風一かすらとわ為葉也 元也

其角白くくらす原の櫻のあれ花——おちそののり  
らぎ敷るり原の櫻のあれ花——多く風景とをそ——  
目せ——くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——

許さる

秋の——くらす原の櫻のあれ花——

くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——

の昔の葉のくらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
昔のくらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
の昔のくらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——

外高——くらす原の櫻のあれ花——

くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——  
くらす原の櫻のあれ花——くらす原の櫻のあれ花——



とらふあつこれき難るうりききとてかかひらふま  
くくくきらふやうやくまうしけらのききききとて  
やうきらふやう

舟乃てきききききききききききききききき  
丁種とのきききききききききききききききき

支考口順徳院乃部製

ちくす川まぢ水きききききききききききききききき  
公致信部の連

水ききききききききききききききききき

とらふあつこれき難るうりききとてかかひらふま  
くくくきらふやうやくまうしけらのききききとて  
やうきらふやう

文章の事

藤田等と源治の文章とてきききききききききききき  
やうききききききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききききききき

海あり我悦の文章いふし不修さとして之  
幸いなるし滞幸とてうらむるもなほいして  
まづ幸の部信の上りなるふらるべしとて  
とてし  
惣名とて文章として帝跋記名後河書のこと  
くひましく海くわはむいふこととてうらむる海  
よむるくくし中り難らうとて  
去其の滞滞とていふとてまづは滞滞文とていふと  
海ハ滞滞とていふ

前本の幸一海釋のことくはしるるを数らのえつと  
とてしるるなりぬる

許らの河原氏使衣のまじひ男女乃中とてしるる一実ハ  
一奇よなるるをか道いふこと一たふ致ま奇の文法  
小一多滞滞又幸れ格式一まじるる一是原芭蕉翁  
とてしるる一措とてしるる氣韻生動とていふとてしるる  
とてしるる漢字かまじりありとてしるる海とてしるる  
とてしるる田の系を案とてしるる和奇のくくふく  
とてしるるととてしるる海とてしるる細末とていふとてしるる

とある一徹横自とありしつゝの意と  
とありてい音韻のむかはしつゝは  
と松坂とは舞とるせふか甚だ下れ  
と音韻のむかはしつゝは舞とるせ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ

支考四讀奇よし文章られい連  
文章いもむつとむつとむつと  
杜陵と學いも奇よし人などし  
宗祇あり徳徳とる芭蕉ありと

つゝとられとるつゝは舞とるせ  
とあるとつゝとられとるつゝは  
舞とるせとつゝとられとるつゝ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ  
つゝとられとるつゝは舞とるせ

昔も御遊の文章いもつゝとら  
勝れると御遊の文章いもつゝと  
つゝとられとるつゝは舞とるせ

才了—文章の書き方と—あつ—教書記法  
理編—の記法と才了—文章の記法と—  
篇の記法と—あつ—あつ—あつ—あつ—  
二つれを記法と—あつ—あつ—あつ—あつ—  
以後—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
才了—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
記法と—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—

記法

才了—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
乃と—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
才了—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—  
—あつ—あつ—あつ—あつ—あつ—



と所不部部とをく十の指さすこと若くは  
の十の指さすこと一徳くいつく一徳修けむなる  
まきつゆの書よらつり席ふ修く文書と我らり  
とつれとつるの連ふまむく定よらつりて連ふ修  
る一文書とつ下せむ及古あり

懐紙の事百款本式あり又十韻字記する等の物  
古今の人の名衣よあも事今人の名をつて一む  
る一一人乃名をあつり一一人をく一一人を  
されとも好く一一人嫌なあり

何乃都ら文う修くやとされ一人よらる人  
是心うけあつり或は下り口時の字あつ目と開てん  
まの目前つりま長秋まつりあつり事常と  
造つる事あり

其角の因席つりつりま一中の一人乃興入る  
まむく人くいつりま感とあつり事  
後より人れまあつりあり  
後より一人も作者まつり御修ハを  
あつり

其角田位一湖塔子中興うらまゑとす一神佛の  
道を犯して五偏とせむ事とす又と物くう頁  
くうとくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
家と云くくくくくくくくくくくくくくくく  
負物くくくくくくくくくくくくくくくく  
きくくくくくくくくくくくくくくくく

と辞せくくくくくくくくくくくくくくくく  
と辞せくくくくくくくくくくくくくくくく

とくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくくくくくくくく

えりやくくくくくくくくくくくくくく  
雙六かせの早とやあ一目かいたくくくく  
おらくくくくくくくくくくくくくくくく  
あま記くくく

あま記くくくくくくくくくくくくくく  
あま記くくくくくくくくくくくくくく  
あま記くくくくくくくくくくくくくく

うく自暴自棄の心も流れてもさうも放散して  
人の心も心よ入して枯もさうしてはふふ松の葉の  
らういせんとはふらういせんとはふらういせんと  
やうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
とふらういせんとはふらういせんとはふふ松の葉の  
のやうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
葉の籠人いせんとはふらういせんとはふふ松の葉の  
やうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
をいせんとはふらういせんとはふふ松の葉の

ふれ浮記集

ふれ浮記集の巻の初めとあつては  
世の自暴自棄の心も流れてもさうも放散して  
人の心も心よ入して枯もさうしてはふふ松の葉の  
らういせんとはふらういせんとはふらういせんと  
やうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
とふらういせんとはふらういせんとはふふ松の葉の  
のやうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
葉の籠人いせんとはふらういせんとはふふ松の葉の  
やうな俳句の籠人いせんとさうしてはふふ松の葉の  
をいせんとはふらういせんとはふふ松の葉の





論小乃と

師をいれしれは風をいし師をいし

此の風をいし師をいし師をいし師をいし

此の人のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし

一の師をいし師をいし師をいし師をいし  
一の師をいし師をいし師をいし師をいし  
一の師をいし師をいし師をいし師をいし  
一の師をいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし

此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし  
此の師のいし師をいし師をいし師をいし



炭俵の布より密ら〜亮よりりてとち〜うとて  
とら〜何ややを屏と寝〜浪屏と涼〜是  
とのば〜金屏浪屏の布情ありされ〜金浪屏の  
涼暖と々の人を付〜くはねとや〜こはぬらとが  
せら〜情を〜金屏浪屏の〜らせら〜情は貴  
人〜家の〜も〜と〜し〜ま〜松のちい  
よ〜〜と〜標つ〜し〜ら〜れ〜よ〜れ〜の  
〜ら〜芭蕉高六を〜交の〜と〜人〜ら〜か〜月  
の〜情〜

致性〜す〜東や浪屏の前と〜

う〜と〜裏ハ空浦次十冬交の中浦〜椽の月の  
〜成〜ち〜し〜玉階東色涼如水〜く〜夜  
の〜板〜し〜娘の〜屏〜松のちい〜を〜  
交〜く〜後志浪屏ハ系〜の〜あやう〜  
〜ら〜中〜交〜は〜浪屏ハ情〜  
花薄〜風〜これ〜情〜風〜二つと〜  
は〜〜

昔の葉と〜の〜

湖東の松嶺う洋小苑紅紫を〜ハ酒を〜飲分れ  
と風情いふ〜作〜人〜中〜は〜と  
ち〜〜人〜あ〜前人の被褥の  
日瘴〜〜年〜の  
〜

今れなまお減らる葉無名とす〜  
美名と用らぬ〜  
何と〜風情に〜感作する人  
尋〜

〜の徒然と用らる〜

俳修を〜の〜  
家〜あ〜服〜  
〜  
〜  
〜  
〜

蕉門俳諧語録下之終

一少せ落乃國語ありて中序ありて常り著るべ  
らる日ありて法師き宗乃き入りて常り著るべは  
まゝとていへりて言乃きまゝとていへりて枕の上の二  
冊の竹紙ありて清くも終るも 祖師孫は古門人の言  
をを集むるに終るなりてなほ西湖の茶肆  
まゝとていへりて言乃きまゝとていへりて一冊あり  
蕉門の正法眼藏物等の單口直入の書ふとて

會つゝととと密く一平して中林より海とあり  
板一録めつふりや法師乃止く不須認也  
彈所とくも恐ろし

安永二酉の冬芭蕉忌の日に備け園田房

古聲年譜書

蕉門俳諧書林

井筒屋庄三郎 板行  
橋本治三郎

蝶々子著述書目

- 芭蕉翁遺句集 二冊 鉾 敬集 一冊
- 同 俳諧集 三冊 宰府紀行 一冊
- 同 文集 二冊 幸本丈艸句集 二冊
- 芭蕉半施の巻 名録集 三冊 類題遺句集 五冊
- 蕉門俳諧終縁 二冊 俳諧名所小鏡 三冊

大神藏本